

米の生産調整について

去年からことしにかけて、いつも農家の皆さんの心に、重石のようにのっかり続けて来た「米の生産調整」の問題が、いよいよ市町村を通じて具体的にやってきた。二月二十三日、県の総合農政対策本部が開かれ、続いてその日の午後の米生産調整分科会で論議された結果、熊本県は、政府から要請された二万六千五百トン以上の米の生産調整目標数量を引き受けることが決定されたからである。市町村別の目標数量についても同意が得られ、各農業団体の絶対のご協力を得て、県、市町村一体となって推進することが決められた。

全く、この数年前まで、日本で米が余り、その作付けを制限しなければならぬことなどだれが考えたことがあっただろうか。「お前たちはそれもわからず指導していたのか」と言われればそれまでだがこれはまことに予測すべくもなく、きわめて突然にこのような事象が現出したのである。品種を含めた生産技術の進歩発展と、連続の好天候のビッタリのみみ合わせによる豊作続き、そして一方では、あとで気づいてみれば三十八年をピークにして、米の総消費量は年々減少していた。

三十九年、四十年、四十一年と東北、北海道は毎年のように冷害に悩まされた。ことに四十年は天明以来の異常天候の年と早くから喧(けん)伝され、東北地方では積雪などのためいつまでも苗しろの

種まきが出来ず、それを苦にして自殺者まで出た。米が足りない。このままだらば外国から年々百万トンも輸入しなければならぬ、何とか米を増産しなければ……その時はだれもがそう考えたのである。真剣に考えたのである。

減つてきた消費量

ところが、四十二年の大豊作に続いて三年連続の千四百万トンを突破する大豊作、これはどうしたことか。三、四年東北地方の連続冷害でガツクリきていたところへこの連続の好天候である。しかし実は千四百万トンの生産量だけについてなら驚くには当たらない。当時は年間千三百五十万トンの消費量だから、毎年人口増、消費増が続けば決して多い量とは考えられないからだ。

もう一つの原因

なぜ米の消費が減ったのだろうか。日本の経済の成長が大きく、なんとか言い

米価安定と増産

さて、米の増産ムードに拍車をかけたものも一つある。ここ数年、概して言えば農産物は上昇を続けた。とは言っても米以外の農産物はいつも価格が不安定である。しかし、米だけは政府が全量買入れを保証し、また、農業団体等の熱心な運動で、十分だったとは言えなくとも、年々かなりの価格の上昇があった。

もっと遠慮なく言えば、米が一番割りに合い、もうけも多く、かつ安心して作ることが出来た。米を作る側ではいよいよ熱が入り、開田が出来るところは少々

の無理をしのいで開田もし、米を作った。農家が得になることならと、指導者たちも一生懸命そのお手伝いをした。そして……悲しい幕切れである。

余剰米は五百トン

余ることがはっきりしたものをどんとん作っていくわけにはいかない。昨年の末の余剰分は五百万トンを越えているという。金は政府が持っている。政府が紙幣を印刷しさえすればよいものではない。政府が持っているすべての金は国民の税金であるはずである。多くの納税者の意思を無視して、まだ米を作るんだ、というわけにはいかない。しかし、急に米つくりをやめてしまつては、いろいろな支障があるだろうから、生産調整奨励金も出してその損失は補償しますよ、とまで言われているのである。このころは、それぞれが、自分のことだけ考えず、少なくとも目標数量だけは米をつくらぬことに協力すべきではなからうか。

作目研究をみんな

では、どのようにして、ということになる。熊本県では四十一年度から「新くまもと米つくり運動」を推進してきた。実は、その最初の時から、農家の総合的な経営とその収入、という面から、米の生産性を上げ、米の増収を図るとも

に、米プラスアルファ、何か米以外で収益の上がるものを地域ぐるみで考え、地域ぐるみで協力して育ててほしい、と指導者の方々に訴えてきた。その芽はまだ残念ながらあまり明らかなものが少ないが、その芽が出かかっているところは、今度こそ、その芽を出来るだけ早く、大きく育てていただきたいと思う。最近しきりに、これからの農業は産業として育てなければならぬ、といわれる。また経済の大きな流れに従って外国からの貿易自由化攻勢もいついつまでもは防ぎきれないよう、早く国際競争力

国際競争に勝つ力と体制を

を持たねばならないといわれる。

お互い、小規模の経営であつてみれば、集団で結束された力で他と太刀打ちするほかにない。作つたものを売る体制、作る体制、一貫した体制つくり、つまりそのような競争に勝つための組織つくりを他に先んじてやらねばならないと思う。たとえば、野菜の指定産地は思い切つて強固な結束力で、全体の視点を拡大すべきであると思う。お互いに研究し、どのような製品を、どのような時期に、どれだけ生産し、それをどこにどのような出荷する、というような綿密な計画を

立て、皆が目標に向かって邁(まい)進することである。

方法と手段は……

県では農業団体と相談をして、肥育牛の団地造成と真剣に取り組もうという農協、あるいは、そういう人々には県、農業団体、市町村も加わつて利子補給をし、うんと安い利子で肥育がやれるようにしよう、指導もしようとする準備をしている。草資源が得やすく、個人経営規模がいくらかでも拡大しやすいところは、このさい、十分研究のうえ、思い切

離農の転機として

その他、もうすでに兼業収入、他産業に大きく足を踏み出している人は、このさいそっくり農業から抜け出してしまつてもいいのではないか。離農の転機としては一つのチャンスだと思われる。

いずれにしてもこれからのいよいよ市町村、農協を中心に米の生産調整は具体的な詰めに入るわけである。そのさい何でも不審なことがあれば、どんどんご連絡をいただき、困難な大きな問題だけれども、ともかく円滑にやり遂げたいものである。

(農政部)